

# 景観からみた混住化類型の検討

正会員○坂本 淳二\*1  
土肥 博至\*2  
鎌田 元弘\*3  
久武 健三\*4  
筒井 義富\*5

## その1. 景観指標による混住化動向の把握

### 1. はじめに

混住化現象は、農家-非農家あるいは新住民-旧住民といった社会的対立関係として把握されてきた。しかし農家の離農、兼業化の進行、農政の転換等により、農家は minority 化しつつあり、また非農家(新住民)は、地縁・血縁の有無、世代等の違い等でいくつかの社会集団に分化していることが認められている。すなわち現在の混住地域は多様な社会集団によって構成される地域であり、二分論的属人関係のみで混住化を説明することは適当とはいえず、空間的枠組みといった新たな視点が必要と思われる。

混住化より生じた空間的問題としては、非農地需要の増加による農地基盤整備への影響、都市的土地利用と農業・農村的土地利用の調整等が挙げられるが、これらの問題は混住地域において都市的要素と農業・農村的要素が二分論的対立関係にあることを前提としたものである。現在の都市近郊農村には、成長する都市の周辺地域として居住・余暇・環境保全など多くの機能を期待されており、地域整備の視点も従来重点にあった農業環境整備に変わり、「快適性」が議論されるようになった。以上の動向の中でも特に地域的・空間的整備の課題として「景観」が注目されており、混住化把握の視点として重要であると考えられる。そこで本研究は、混住化の進行する首都圏(371市町村)を対象に、①景観指標に基づく広域レベルでの混住化動向の把握と②景観指標を用いた適切な地域類型の設定を試みるものとする。

### 2. 景観指標の設定

景観を混住化把握の指標として定義するにあたって、以下の様な立場を規定する。

- ・物理的な空間構成・機能を示す形態として捉える。
- ・一定の空間領域を総合的に示しうる。
- ・時系列的变化を伴う。

以上を踏まえて、広域レベルにおける景観指標として表-1に示すように、①農業的景観を示す耕地面積率、②自然的景観を示す林野面積率、③総合的に田園景観を示す田園面積率を設定した。これらは、従来の農村の景観構成要素を領域的に示すとともに、同時に存在する都市的景観の状況を把握することが可能であり、混住化を

表-1 景観指標の定義

耕地面積率	=	$\frac{\text{市町村の耕地面積}}{\text{市町村の総面積}}$
林野面積率	=	$\frac{\text{市町村の林野面積}}{\text{市町村の総面積}}$
田園面積率	=	$\frac{\text{市町村の(耕地面積+林野面積)}}{\text{市町村の総面積}}$

(1980年、1990年世界農林業センサスより作成)

表-2. 田園面積率と内部非農家率の変化

	1980年		1990年	
田園面積率	59.0%	21.0	55.9%	21.2
内部非農家率	64.8%	22.1	75.0%	17.8

左欄：平均値，右欄：標準偏差

示す景観指標として適当と考える。

### 3. 景観指標にみる混住化動向

表-2に、1990年及び1980年における首都圏371市町村の田園面積率と内部非農家率<sup>②)</sup>を示した。内部非農家率が10%程度上昇しているのに対し、田園面積率は約3%下降している。両指標とも非農家化・都市化の方向を示してはいるが、人口指標である内部非農家率に比較して景観を示す田園面積率の変化は小さい。居住者属性の変化と空間変容が必ずしも同時に出現しないことが読み取れる。

図-1及び図-2は、1990年及び1980年における田園面積率毎の市町村分布を示している。両年とも東京都心40km圏内に田園面積率40%未満の都市的景観の卓越する市町村が連坦し、都市圏的構造を形成していることがわかる。また首都圏外縁の丹沢、秩父、足尾等の山地部及び常総、下総、房総等の台地部に田園景観率70%以上の市町村がまとまって分布する傾向が見られる。

特徴的变化として、1990年では、高崎線、常磐線等の主要鉄道路線沿線や前橋・高崎、宇都宮、水戸といった北関東の中心都市とその周辺の市町村において、田園面積率が低下している点が挙げられる。1980年前後から転入混住の進行する上記の地域において、景観の変容がようやく明瞭になってきたことを示すものである。

Investigation of the coexisting phenomena from landscape point of view

part1. Study on tendency of coexisting phenomena based on index of landscape.

SAKAMOTO Junji et al.

次に、首都圏における地域的景観の特徴を捉えるために耕地面積率及び林野面積率毎の市町村分布を概観する(図-3, 図-4)。農業的景観の卓越する市町村(耕地面積率40%以上)は、利根川水系にに沿った北関東平野部、常総台地及び九十九里平野にまとまっている。ただしこれらの地域の大半の市町村が林野面積率30%未満と森林景観には乏しい。一方丹沢、秩父、足尾等の山地では耕地面積率が15%未満と農業的景観は

希薄であるが、林野面積率は70%以上であり、山地の特色が表われている。首都圏の景観的地域構造として、東京都心を中心とする都市的地域、外縁部にまとまった森林地域、常総台地、九十九里平野を中心とする農業地域及び主要鉄道路線沿線、外縁部中心都市周辺の景観変容地域を確認できる。

注)市町村の農業集落非農家戸数を総戸数で除したのもの。算出においては非農家集団戸数を除いている。

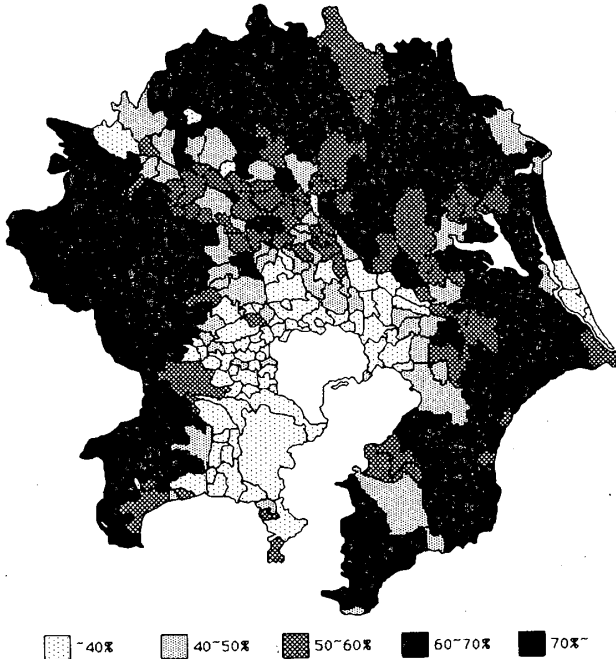


図-1. 田園面積率による市町村分布 (1990年)

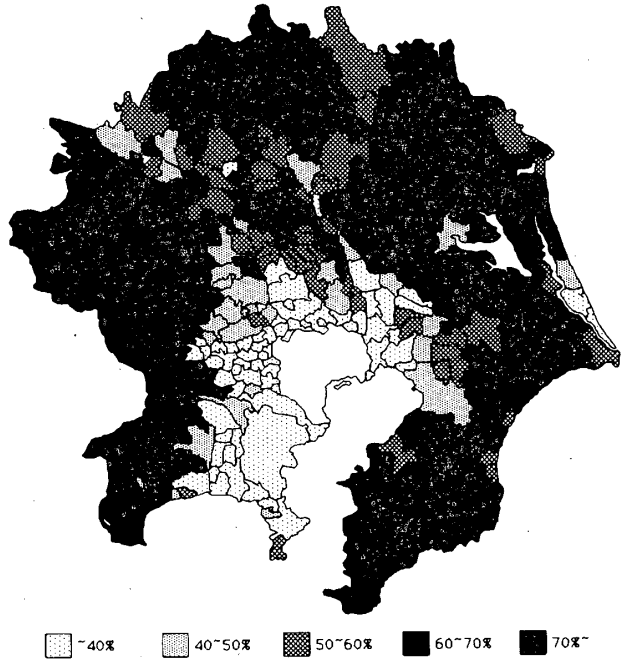


図-2. 田園面積率による市町村分布 (1980年)

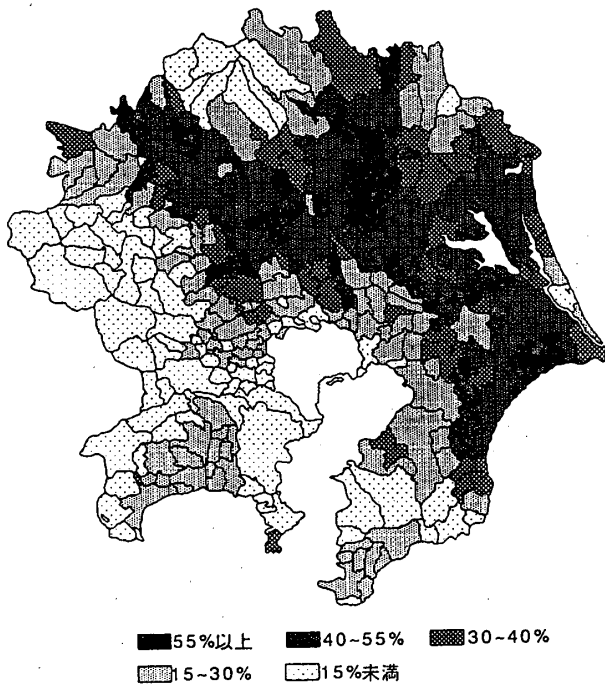


図-3. 耕地面積率による市町村分布 (1990年)

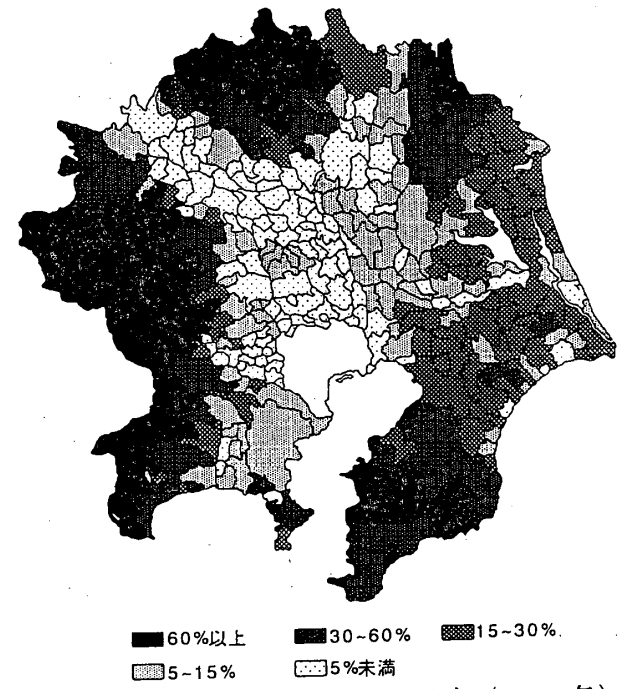


図-4. 林野面積率による市町村分布 (1990年)

\*1 筑波大学準研究員  
\*2 筑波大学教授  
\*3 千葉工業大学講師

\*4 千葉工業大学大学院  
\*5 農業工学研究所室長

\*1 Associate Rs.,Tukuba University.  
\*2 Prof.,Tukuba University.  
\*3 Instractor,Chiba Institute of Technology.  
\*4 Graduate School,Chiba Institute of technology.  
\*5 Chief,Institute of Agricultural Engineering.